

「現代社会における道院の意義」

川西南道院 本慶 忠士

はじめに
窮屈で疲弊した社会と人間
「人間交際」の場としての道院
武道組織としての意義
さいごに

はじめに

私は金剛禅に入門し、禅の言葉「心外無法（心外無別法）」という言葉を知った。「心のほかに別にとりたてて法（自然や社会、宇宙の法則、ダーマ）はない。心によって世界の在り方が決まる（引用①）」という一つの教えである。美術品を見て感動するのもしないのも、自分の人生がすばらしいと思うこともつまらないと思うことも、自らの考え方、感じ方次第である。世界とはそんなもので、客観的な状況などというものは存在しない。要するに今我々が見、聞き、触れて感じている世界も、それを決定づけるのは心だといっているのである。

この言葉は私に、金剛禅の根本思想、「自己確立」「自他共楽」をより具体化させてくれた。より良く生きようとすることも、よりよい世の中にしていくことも、そのためにアクションを起こしていくことも、それは他人や環境がもたらしてくれるものではなく、自分の心のあり方（内的動機）が全てであるとわかった。

「人は、心に思った通りの自分になる」

努力すれば人は向上するが、諦めればそれまでだという意味であるが、これは私を指導してくださったある先生方の言葉である。

私は仕事柄、転勤を繰り返してこれまで4つの道院を渡り歩いてきた。指導に当たることが多くなった昨今、この経験は誰もが持ち得ることのできない、大変貴重なものであったのではと考えるようになった。それぞれの道院の先生や先輩方、仲間たちの、少林寺拳法の技術はもちろん、考え方、言葉や行動に金剛禅の教えを学ぶことができたからだ。そして今、その指導者としての立場を与えられ、その人生を歩もうとしている。「心外無法」の考えに則せば、これもまた自分の心から沸き起こった使命感のようなもの（内的動機）が、自分の世界、生き方になろうとしているということになるだろう。多くの苦労やディストレスもあるが、「自他共楽」、社会貢献に向けて努力していく心づもりだ。

さて、今日の社会の中で、少林寺拳法の拳士として、金剛禅の布教者として、何ができるか、その意義は何か。これまでに学んできた先生や先輩方の折々の言葉を紡ぎ、考え方に学び、今後の自分の行動と道院の在り方を論じていきたい。

窮屈で疲弊した社会と人間

このSNS時代、私たちはとてつもない自由を実現し、どこで、誰とでもつながり、自己を表現し、発言できるようになった。また我が国はここ数年で更なる経済成長を実現した。物質的な豊かさにあふれ、特にIT関連技術は飛躍的に進歩した実感がある。では私たち人間自身の進歩はどうか。経済成長やITなどの技術革新は、同時に私たちに過剰競争とストレス社会に生きることを課した。人はこの大きなうねりにのまれて疲弊し、それに耐えられなくなった。SNSでは他人の些細な失敗を、おびただしい人の数で攻め立てて中傷する。人の心はささくれ立って、あおり運転などというものが出現した。弱者や外国人への差別的な発言なども公然と行われている。私たちは人間同士のつながりを欠き、揉み合い援けあう人の本来の温かさを忘れた。我が国の100万人の引きこもりと、年間3万人の自殺者、3万人の孤独死者がこの疲弊した現代社会を物語っている。

子どもたちへの影響も少なくない。世間では家庭や学校、スポーツクラブなどで誤った指導やしつけが取りざたされる。そこに常に存在するのは、様々なストレスを抱えた大人たちである。それが子どもたちの素行や行儀に非常に影響しているように思われる。どの社会や組織においても、子どもの指導やしつけは煩雑で難しく、どの道院の先生方も苦労されている。現代社会の不和が子どもたちに影響している事は間違いないようである。

「人間交際」の場としての道院

つながりを欠いた社会に求められるのは、真の「人間交際」ではないか。それはSNSなどの表面的なつながりにとどまらない、手を取り合い協力し合う重厚な交流のことである。少子高齢化、社会システムの複雑化などの背景が、顔の見えない社会を引き起こした。現実に私自身も転勤を繰り返しており、地元を離れ、置かれた場での地域的な交流はほとんどない。隣人すら誰かわからない。「かつての時代は、家族、地域、学校、企業など様々な仲間の集まりやサロンのような社交の場が、現代よりは機能していた（引用②）」といわれる。そしてその中で、「様々な葛藤や矛盾を含みながらも人間交際を行うことで、社会は一定の倫理的価値を保ち、人を成熟させてきた（引用③）」と考えられる。本来、社会とは人と人のつながりそのものなのである。

人には、経済成長や物質的な豊かさの他に、社会の中の自分の居場所、つまり公共的で社会的な次元での豊かさが必要である。

とある道院で、少年たちを叱ってもなかなか練習に集中してくれず、困って道院長に次のように聞いた。「彼らは指導者の言うことも聞かず、なかなか上達しそうもないのですがどうでしょうか」と。すると、予想外の答えが返ってきた。「いや、今日道院に来ただけでも、すでに私たちの目的の7、8割は達成できている」と仰るのである。最初は理解できなかったが、その真意は、毎週道場へ通い、友達と話し、触れ合いながら、「人間交際」を経て人として成長することが大旨であるということだったのである。技術指導ばかりに視野

を狭めていた私に、大局的な視点を与えてくれたのだ。「叱るより、(気持ち)を乗せなさい」、無理やりやらせるのではなく、道院に通える幸せと楽しさを見出させながら修練に取り組み人を育てる、一つの居場所としての道院の特性を感じ取れたのである。

学校の勉強についていけない子、家族や友達のことでも悩む子はどこの道院にもいる。それに対して私がしてあげられることは少ない。しかし道院で、仲間と切磋琢磨しながら、大会に出場し、昇級昇段し、そして無事進学していく姿をみると、ここに通ってくれてよかったと思えるのだ。もしその拳士が孤独に悩み、思い臥せていたらどうだったろうか。

道院という一つの社会組織において、武術を修練し、合宿を組み、行事を取り行い、バーベキューをして家族や友人と過ごすことは、教養や教育を含む文化的な生活と、人と人の間の信頼できる関係を構築し、それによって人をつくることに繋がる。ここに道院の社会的な意義を見たような気がしたのである。

武道組織としての意義

このSNS時代においては、ケンカや腕力の強さが社会にそれほど意味をなさないという事は既に世間一般にも普遍化されているといえる。しかしそのような世情にあっても武道を修める意義は不変である。なぜなら、どのような時代にも、何らかの不安や劣等感、孤独、寂しさを抱えている人は常に存在し、そのような情感は強くなりたいたいという感情に強く結びつくからだ。入門の動機は様々にあるが、彼らが強くなりたいたいという漠然とした心境を心深くに抱えていることは確かだろう。

武道を修める意義の一つに、まずは自己確立、自信をつけることが挙げられる。自信や勇気は行動の動機付けに不可欠である。私自身が、修練において拳士の前で基本練習をリードしたり、あるいは職場で人をまとめる立場として、多少なりとも叱咤したり諭したりすることができるのも少林寺拳法でつけた自信があるからこそである。

私の実感として、運動能力の高い子もパツとしない子も、成長期を迎えたころに突き蹴りの強さが急に上がるのを感じる。目が輝き、顔付きも変わり、年齢に伴う精神成長とは別の、自信にあふれた佇まいを感じるのである。ある先生はこう仰った。「武の力は予想以上に人に自信を持たせる。」と。後に「過剰にならないよう留意しなきゃいけない。」と続くのだが、彼らが少林寺拳法を通して、可能性の種子であること、自分もやれるんだということを実感しているのではないだろうか。

武道を修める意義としてもう一つ、相手や他人を思いやる気持ちを養うということも挙げられる。

本来武道とは、矛をおさめ争いを止めるためのものである。私たちは道院で曲がりなりにも修練を続け、人としての強さとある程度の自信をつけ、成長していく。それは少林寺拳法が他のスポーツとは違う、勝ち負けにこだわらない、人を活かすことを目的としているからに他ならない。「組手主体」の修練は、他人の上達のために身を奉じ、または自己の上達のために相手に痛い思いをしてもらう。一定の信頼と、相手を受け入れる心がなければなしえ

ない。一人の強者を育て、他の誰かを倒すための修練ではないゆえ、本当に力が必要な者に力を与え、力を持った者に真の強さを問うのである。

さいごに

「心外無法」という言葉の含意は、不撓不屈の精神を持って心の平穩を保ち、自分を変え、自分が変われば人が変わり、人が変われば世の中が変わることと私は通釈している。

人と人が出会い、交流して少林寺拳法を修め、人をつくり、社会へ貢献する。この金剛禅運動と呼ばれる活動に資する最たるものは、道院運営に他ならないだろう。道院は、拳士の拠り所として、居場所として、技を学び、自分を変える場でありたい。

これまで先輩方や先生方が培われてきた金剛禅運動を、これからの私たちの世代が受け、そしてまた次の世代へと受け継いでいく使命がある。そのために「死ぬまで勉強」、これもまた、ある先生から教わった言葉である。

【参考文献・引用】

- ・「少林寺拳法教範」第一編 宗道臣 著
- ・「禅語遊心」 玄侑宗久 著 (引用①)
- ・「異論のススメ」(朝日新聞) 佐伯啓思 著 (引用②③)